

考古資料からみた中世集落における消費活動

草戸千軒遺跡における資料形成過程の分析 鈴木康之

Characteristics of Consumption in a Medieval Town "Kusado Sengen": An Archaeological Study on Formation Processes of Medieval Artifacts

はじめに

- ① 計量分析をめぐる研究の現状
- ② 考古資料の形成過程
- ③ 消費財廃棄の過程
- ④ 集落における搬入と廃棄のモデル
- ⑤ 草戸千軒における消費活動の特質
おわりに

【論文要旨】

中世の消費遺跡をめぐる考古学的研究では、近年、資料の計量分析がさかんに行われ、数多くの成果が蓄積されつつある。しかしその一方で、分析結果を解釈し、過去の人間活動を復元するための方法は十分に論じられてはいない。

筆者は、考古資料から人間の消費活動を復元するためには、資料の形成過程についての分析が重要な役割を果たすと考えており、本稿ではまず Michael Schiffer による資料形成過程の概念を紹介した。Schiffer は、考古資料に示される過去の人間活動の痕跡は当時から変化せず現代にもたらされたものではなく、さまざまな文化的・非文化的の変換作用を経たものだと言及。さらに、変換作用が引き起こされる状況は「機能的文脈（現実の社会における関係）」と「考古学的文脈（遺跡・遺構における関係）」とに区分できることを示している。これらの指摘は、日本中世における消費活動を考古学的に分析する上でも参考になる点が多い。

形成過程分析の具体的事例として、草戸千軒遺跡（広島県福山市）から出土した輸入陶磁器・滑石製石鍋・木製食膳具の分析を試みた。分析に際しては、集落に搬入された消費財がどのような過程を経て廃棄、あるいは相続されるかを示す「搬入と廃棄のモデル」を設定した。このモデルに基づいて資料形成過程を解釈することにより出土資料の計量分析結果に認められるいくつかの事象が、過去の人間集団の消費活動をどのように反映しているかが推測できるようになる。検討の結果、耐久消費財はそれが生産され、流通した時期に多くは廃棄されないこと、生活環境の変化を契機に多くの耐久消費財が廃棄されることなどが、具体的な出土状況に即して説明できるようになった。また、草戸千軒の集落における消費財廃棄のパターンから、限定された空間内で密度の高い消費活動が行われていたことを指摘し、これが集落の「都市的」な特質の一端を示していると考えた。

はじめに

考古資料とは人類のさまざまな活動の物質的な痕跡であり、それらは人間の行動と自然環境との相互作用の中で生み出されてきたと言える。例えば、陶器の生産には原料の粘土を自然界から獲得しなければならず、その痕跡は粘土の採集地に残される。採取した粘土を加工し、製品として仕上げるためには加熱する必要がある、その施設の痕跡が窯跡となる。製品が消費されたのちに廃棄されると、その結果は消費遺跡の出土資料として確認することが可能になる。このように、人間の諸活動は自然環境に多様な痕跡を残すが、当然のことながら過去のすべての痕跡が当時のままの形で現在まで残っているわけではない。さまざまな作用により、変化し、薄れ、消滅する痕跡も多い。また、自然環境への働きかけの弱い活動、例えば「考える」といった精神的活動などは物質的痕跡を残さない。そこで、考古資料から過去の人間活動を明らかにするためには、断片的な痕跡を分析し、欠損部分を補いながら全体像を復元していく作業が必要となってくる。

ここで取り上げる「消費」という活動も、人間行動の一部分を構成している。消費活動の場合にも、製品の使用や廃棄のように物質的な痕跡を残しやすい活動と、いわゆるサービスの消費のように物質的痕跡を残しにくい活動とがある。しかし、後者の場合でも何らかの製品や生産物が介在することがあり、直接的ではないにせよ物質的な痕跡をとどめる場合が多いと考えられる。渡し船を例にとれば、船に人や荷を載せて往復する活動そのものは物質的な痕跡を残さないが、船着き場の施設や船の部材などが検出できれば、そこに渡し船が存在し、渡し船を利用するというサービスの消費が行われていたことを推定する根拠になる。また、広島県福山市の草戸千軒町遺跡から出土した木簡の分析によって、この

集落に金融業者が存在していたことが明らかになったが、これも金を貸し借りする活動そのものが物質的な痕跡を残したのではなく、金融活動の一端を記した木簡という間接的な痕跡をもとに復元されたものである。

このように、考古資料は過去におけるさまざまな人間活動を復元するための重要な情報源となる可能性をもっている。文献資料が比較的多く残っているとされる日本中世史研究においても、それは例外ではない。一九七〇年代以降、消費遺跡の調査例が急激に増加したことが背景となつて、考古資料によって得られた情報が中世史研究の中に占める比重は次第に高まってきた。文献資料に記録されなかった活動の、「物的証拠」としての役割を考古資料が果たしてきたと言えるだろう。同時に、文献資料とは異なる考古資料の特質にも目が向けられるようになり、資料論の立場から中世史学・考古学・民俗学・地理学・建築史学などが扱う資料の特質や方法論が議論されている。その成果は、帝京大学山梨文化財研究所で一九九〇年から一九九五年にかけて開催されたシンポジウム、「考古学と中世史研究」の報告（石井編一九九一、網野・石井編一九九二、石井・萩原編一九九三、網野・石井・谷口編一九九五、網野・石井編一九九六、網野・石井・鈴木編一九九七）などにみることができるといえる。

「文書史料はきわめて雄弁だが、同時によくウソをつく、これに対して考古資料はきわめて寡黙だが、まさに真実を体現している」と表現されることがある（石井一九九九）。この言葉は、文献資料・考古資料を扱う双方の研究者が共同作業を進める中で実感されてきたものと言える。しかし、こうした認識を共有しながらも、考古資料を扱う側から今一度取り組んでおく必要があるのは、本当に考古資料が真実を体現しているのかどうかを検証すると同時に、真実を語らせるための方法論を確立する作業である。のちにも述べるように、考古資料の「物的証拠」としての特質を当然の前提として盲信するあまり、資料の分析・解釈のための方法論に関する基礎的研究が遅れていることが指摘されてきた。例えば

小野正敏は、「彼らを寡黙にさせているのは、聞き手であるわれわれが話を引き出すのが下手なのではないか。われわれは、彼らの話に謙虚に耳を傾けているだろうか。彼らの話を曲げて聴いていないだろうか。」と問題を喚起している（小野 一九九五）。そうした問題を多くの研究者が感じながらも、具体的な中世の考古資料に即して資料解釈の方法論に取り組んだ例は、残念ながらそれほど多くはない。しかし、こうした作業を積み重ねることによってはじめて、上記のような文献資料・考古資料それぞれの特質を生かすことが可能になり、学際的な研究も期待される成果を上げることができるとはちがいない。

以上のような問題意識のもと、本稿では中世集落の出土資料に残された痕跡を解釈し、そこから消費活動を復元する方法を「資料の形成過程」という視点から検討する。また、集落における消費活動を復元する中から、その質や量の違いがどのような形で表れてくるかを検討することによって、都市における消費活動の特質についても考えてみたい。

① 計量分析をめぐる研究の現状

計量分析の成果

日本の中世考古学は、『日本の考古学』（三上・榎崎編 一九六七）によって社会経済史研究としての有効性が提示され、それ以後の研究の方向を決定することになった。特に、社会の発展過程が各時代の生産力とそれに照応する生産関係の相互関係の中に見いだされるといふ視点から、生産をめぐる諸問題に焦点が当てられた（榎崎 一九六七）。その一方で、流通・消費をめぐる問題についての論考が占める比重は、生産のそれに対して必ずしも高いものではなかった。この段階では、中世の流通・消費を考古資料によって論じるだけの資料が出揃っていなかったことがそ

の背景にはあった。しかし、一九七〇年代以降、各地で消費遺跡の調査例が急増したことによって、一九八〇年代には流通・消費をめぐる社会経済史的研究が大きく進展することになる。

一九八〇年代以降に進められてきた中世の消費をめぐる研究に見られる一つの傾向として、出土資料の計量分析を通して消費の質や量が検討されていることが挙げることができる。『日本の考古学』の段階では、田中琢による土師器の器種分化や瓦器碗の寸法規格についての先駆的な分析（田中 一九六七）があるものの、計量・統計的手法を用いた研究はそれほど多くない。ところが、近年の中世遺跡に関する研究、あるいは発掘調査報告書における考察には計量分析がさかんに導入されており、この傾向は生産遺跡の研究にも反映されるようになってきている。

こうした傾向を確立するきっかけとなったのが、一九八三年に開催された「第4回貿易陶磁研究集会 日本各地の遺跡における陶磁器の組成と機能分担」であった（日本貿易陶磁研究会編 一九八四）。もちろん、それ以前にも消費遺跡における計量分析は個別には発表されていた。例えば、宇野隆夫による中世京都の土器様式に関する研究（宇野 一九八一）などがある。しかし、一九八三年のこの研究集会で東西日本の代表的な遺跡のデータが発表されたことによって、個別の遺跡における資料分析のみならず、遺跡相互の比較においても計量分析が有効な手法となることが提示された意義は大きく（小野 一九八四）、その後の研究にも影響を与えることになった。また、中世遺跡の調査事例が増大する中であって、大量の出土資料、特に土器・陶磁器を中心とする資料を効率的に整理・分析し、その特質を簡潔に表現するための方法としても、多くの研究者によって計量分析が導入されていくことになった。

こうしたデータの蓄積をもとに、土器・陶磁器を中心とする消費物資の地域性や階層性などが次第に明らかにされてきた。計量データに基づく近年の研究成果の一例としては、宇野隆夫による中世食器の研究を挙

げることができる〔宇野一九九七〕。ここでは、各地の遺跡の計量分析結果をもとに、中世的食器様式の示す意味や、そこに反映された日本中の社会構造などが論じられている。一九八〇年代からさかんになった計量分析が、資料の内容や特質を表現する段階から、社会の特質を表現する段階にまで到達したと言うことができるだろう。

計量の方法

計量分析が活性化して行く中で当然議論しなければならないのが、どのような方法で計量するか、つまりその方法論をめぐる問題である。しかし、中世の考古資料でさかんに計量分析が行われているにもかかわらず、この問題に正面から取り組んだ研究はそれほど多くない。ここでは再び宇野隆夫の研究を紹介する〔宇野一九九二〕。宇野は食器計量の方法として、「個体識別法」「口縁部計測法」「特定部分計算法」「破片数計算法」「重量計測法」を挙げ、それぞれの利点・欠点をまとめている。

さらに、その中でも個体数が得られる点において個体識別法がすぐれているが、資料に制約がある場合には口縁部計測法や破片数計算法を併用し、個体数に換算することを推奨している。ここで個体数を求めることに力点が置かれているのは、のちに中世食器様式の示す意味を明らかにしたことに示されるように〔宇野一九九七〕、土器・陶磁器だけではなく、ほかの材質を含めた食器をどのように組み合わせて使用していたかが社会構造を明らかにする上で重要だと考えたことによる。

しかしながら、実際の事例では個体数を求める方法よりも、破片数を計量する方法が採用される場合の方が多いように思われる。これは、多くの研究者の当面の課題に個体数が必ずしも必要とされていないこと、一つの理由があるだろう。馬淵和雄も指摘するように〔馬淵一九九七〕、複数資料群を比較するためには、それぞれが同一の方法で計量されていれば十分に有効な指標となり、計量方法はどのような方法でも当面の課

題に取り組むことは可能なのである。また、破片数の計量はそれほど手間を必要としない簡便な方法であるのに対して、個体数を求めるにはほかの計量方法から換算する必要がある、換算方法というパラメータの介在が、かえって相互の比較を困難にしているという事情もある。

結局のところ、計量分析の方法は個々の研究者の関心や目的によって適宜選択されているのが現状である。研究の目的が変われば分析の方法も変わるのは当然で、そうした繰り返しによって、これまでの計量分析の成果が蓄積されたとも言える。また、さまざまな方法を試行していくことが、今後の計量分析の研究を深化させることにもつながっていくだろう。しかし、それとは別の立場で注意しておきたいのは、次第に増大して行く考古資料の効率的な活用を図るためには、統一的方法によって計量結果を記録することが必要だという宇野の指摘である〔宇野一九九二〕。宇野は同時に、蓄積された大量のデータの操作はコンピュータの発達によって容易になるとも述べているが、この指摘はインターネットという情報基盤が利用可能になった今日、ますます重要な課題として私たちに迫ってくる。さまざまな分野においてデータ記述方法の標準化が検討されている中で、増大する考古資料をどのように記録・記述すれば今後の共有・再利用が図れるのか、計量分析の方法とともに、資料を共有・活用する方法についても検討すべき段階となっている。

②考古資料の形成過程

形成過程の重要性

ここまで述べてきたように、現在の計量分析をめぐる研究は、複数の資料群の計量結果を比較・検討し、そこから時期差・地域差・階級差など、分析者の関心に基づき差異を見いだすことが主たる目的となってい

る。こうした研究の在り方はこれまでも一定の成果を挙げてきているし、今後とも継続する必要があることは否定しない。しかし、考古資料から人間の消費活動をいかに復元するかという立場に立つとき、現状の分析方法を進めていくだけでは解決できない重要な問題があることに気づく。

ここで、現在の私たちの消費生活に一例を借りてその点を考えてみることにする。現在、環境問題が地球規模の課題として取り上げられる中で、ほとんどの自治体でごみの分別収集が行われている。例えば私の住む地区では、毎週月・木曜日が可燃ごみ、毎月第二・四水曜日が資源ごみ（リサイクルできるごみ）、毎月第一・三・五水曜日が埋め立てごみ（リサイクルできないごみ）の収集日と決められている。アパートの前にあるごみの集積場所には、可燃ゴミの収集日には生ごみや紙を主体とするごみが集まり、資源ごみの収集日にはガラス瓶や空き缶といったリサイクル可能なごみが集まってくる。ところが、アパートの前の道路を挟んだ反対側は収集日の割り当てが異なっているので、同じ日でも道の両側には組成の異なるごみが集積することになる。もし、ある日のごみ集積場所が埋没して遺跡になり、後世の研究者が両地点のごみの組成を計量分析したとすると、彼らはこれをどのように解釈するだろうか。片方の地点ではガラスや金属（空き缶）の比率が非常に高いが、もう一方では有機物の占める比率が高いという計量結果が得られる。同じ生活面に位置する遺構なので、時期差はほとんど考えられない。もちろん地域差でもない。ということは、道に隔てられた両地区の機能が異なっていた、あるいは住人の階層が異なっていて、これが遺物組成の差に表れたと判断するのだろうか。あるいは、両遺構の性格が異なっていたなどと判断するかも知れない。

もちろん、これらの推論は誤っている。道路を挟む両地区の機能や住人の階層は異なっているかも知れないが、それが遺物組成の差異の原因

になったわけではない。また、両遺構ともごみの集積場所としては同じ機能をもっており、基本的な遺構の性格に差はない。では、推論を誤った原因はどこにあるかという点、それは少なくとも資料の計量方法でないことは明らかである。個体数で計量しても、破片数でも重量でも、ガラスや金属が多数を占めるといったことはおそらく変わらず、それが推論に影響することはないと考えられるからだ。誤りの根本的な原因は、遺構や遺物を形成させた社会システムへの配慮が欠けていたことにある。つまり、ごみの分別収集というシステムが社会の中に存在し、そのシステムに基づいてそれぞれのごみ集積が形成されたことが理解できていなかったのである。分析者の関心に基づく指標だけから分析結果を評価する方法では、このような誤りに陥りやすい。両遺構の遺物組成の差異の原因を説明するためにまず重要なことは、対象としている資料がどのような過程を経て形成されるに至ったのかという、遺構・遺物の形成過程を検討することである。この視点を欠いたままでは、どのような計量方法を採用したところで、組成の差異の本質に迫ることはできない。まして、その背後にある人間の消費活動の実態を明らかにすることなどできないだろう。

計量分析の方法と、その結果を解釈するための理論とは別の問題である。全国の中世遺跡で次々と計量分析の成果が蓄積されているが、データの蓄積だけで中世の消費活動の実態が説明できるわけではない。蓄積されたデータを解釈するための一つの理論として、資料の形成過程についての研究を深める必要がある。

Schiffer による形成過程の説明

考古資料の形成過程に関する概念は、Michael B. Schiffer によって体系的にまとめられている¹⁾(Schiffer 1987)。彼は、考古資料から明らかにする過去というのは、当時から変化せずに私たちにもたらされているの

ではなく、さまざまな変換作用を経て現在にもたらされていると説く。そして、変換作用を受けて考古資料が形成される過程を、資料の形成過程 (formation process) と呼ぶ。形成過程は、人間が関与する文化的作用によるもの (cultural formation process) と、自然環境から受ける非文化的作用によるもの (noncultural formation process) とに区別される。また変換作用の側からは、文化的活動に起因する変換作用 (C-transform) と、自然現象に起因する変換作用 (N-transform) という区別も提示している。私たちが過去の社会や人間の行動を明らかにするためには、資料が受けてきた変換作用を理解し、それらがどのような過程を経て形成されているかを分析する必要があるという。

また Schiffer は、人類の物質文化に関する資料を「歴史資料 (historic record)」と「考古資料 (archaeological record)」とに分類する。この場合の歴史資料というのは、現実には機能している社会の中に保持されている資料のことで、私たちが毎日実際に使っている道具や身の回りの品々、伝世してきた古文書や陶磁器などがこれに相当する。これらは、生きた社会や人間の行動と機能的・有機的なつながり (systemic context = 機能的文脈) をもっていることに特徴がある。そして、本来は歴史資料であったものが廃棄や埋納といった行為によって実際の社会から切り離されると、それは考古資料へと移行する。考古資料は実際に機能している社会とはつながりをもたず、遺跡や遺構との関連 (archaeological context = 考古学的文脈) において保持されることになる [Schiffer 1972]⁽²⁾。

Schiffer が論じたこのような関係を、私なりにまとめてみたものが図1である。私たちの社会が生産・使用・保管しているものが歴史資料で、それらは人間行動に基づく文化的作用によってさまざまな変換されている。そのため、必ずしも現在の社会をそのまま反映してはいない。例えば、分別収集されて集積場所に置かれたごみは、これから収集車に載せ

られ処理場に運ばれるという意味において、未だ生きた社会と機能的なつながりをもっている。また、その組成は分別収集という文化的作用によって選別されているため、私たちが毎日消費している物資の組成を正しくは反映していないのである。そして、このごみがどこかに埋められたとしよう。すると、これらは生きた社会の文脈から切り離されて考古資料に移行する。考古資料は人間によって再び掘り出されることがない限り、もはや文化的作用は受けず、非文化的作用によってのみ変化する。例えば、有機質の生ごみが腐敗・分解して形を残さないことなどがこれに相当する。この非文化的作用によっても、資料はさらに選別・変換を受けることになる。また、いったん埋まってしまった考古資料が何かの機会に掘り出されることがあれば、その資料は再び歴史資料に移行し、生きた社会との関わりをもつようになる。もちろん、発掘調査によって資料が回収されることも、考古資料から歴史資料への移行の一つに含まれる。このように、歴史資料と考古資料とは双方向に往復することがありうる。私たちが遺跡において手に入れた考古資料とは、以上のようなさまざまな文化的・非文化的作用を受けながら形成されてきたものなのである。

Schiffer は、消費財が考古資料に至るプロセスの基本的なモデルも提示している [Schiffer 1972]。そこでは消費財を「耐久消費財 (durable elements)」と「消耗財 (consumable elements)」という二つの要素に分け、そのライフサイクルを説明している。まず、耐久消費財はその素材が自然界から「獲得」され、「加工」という過程を経て「使用」のステージに至る。耐久消費財の特徴は、使用のステージが継続し、「保守」されながら繰り返し使用されることである。そして使用された消費財は「廃棄」というプロセスを経て「廃棄物」になる。もちろん、この廃棄物こそが考古資料の実体である。一方、消耗財の場合も同様に自然界から素材が「獲得」され、「加工」を経て「消費」される。ただし、消耗

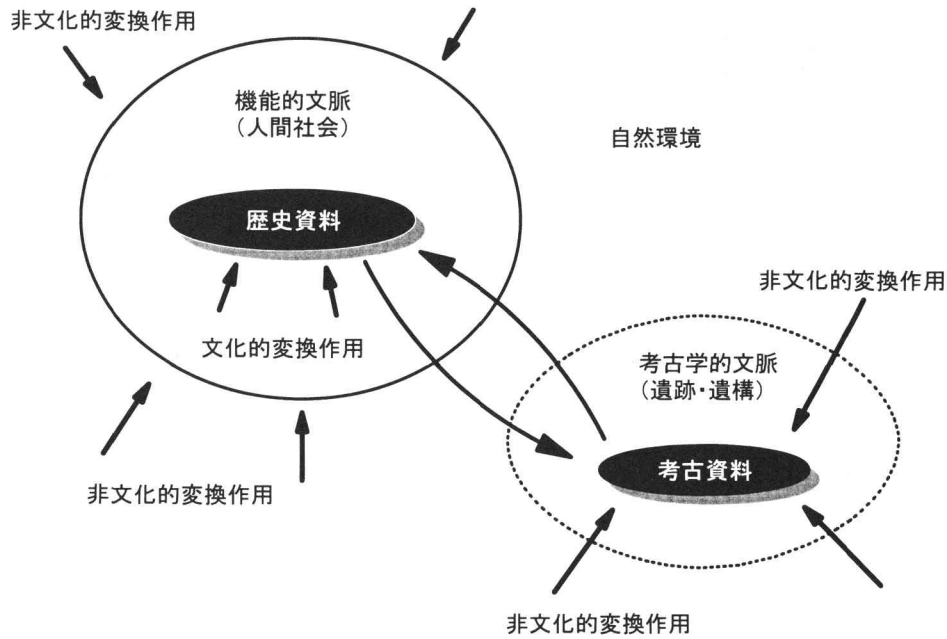


図1 歴史資料と考古資料の概念図

財は基本的には一度の消費によって消費財としての価値が消却され、「廃棄」され「廃棄物」へと至る。

以上概略をまとめたような Schiffer の資料の形成過程をめぐる説明は、私たちが中世遺跡の出土資料を解釈し、そこから過去の消費活動を復元する上でも有効な指標となるだろう。

ところで、日本中世の考古資料をめぐる議論の中でも、考古資料が当時の社会をそのままの形で反映したものではないことは、何人かの研究者によって指摘されている。しかし、Schiffer が取り上げたような、いかなる変換作用を受けて資料が形成されるに至ったかという問題は、ほとんど議論されていないように思われる。土井義夫も指摘するとおり〔土井 一九九五〕、「どうして地下からいろんなものが出てくるのだろうかとか、どういうふうにして残されて、現在に至って私たちの目の前にどのような姿であられることになったのか、といった資料の残りかた、残されかたという基本的な問題、つまり考古学資料の固有の性格というのはあまり厳密に検討されてこなかった」のである。

例えば小野正敏は、中世遺跡の発掘調査によって最も普遍的に得られる陶磁器の考古資料としての性格を、「それは実際の生活の中でつかわれておりましたたくさんの品々の中から、ある条件においてそれが一番残ったと考えられる」もので、「本来の状況と違い、廃棄された分がそこに残っているんだと考えた方がよく」、「生活の中のかなり限定された部分」であると説明する〔小野 一九九二〕。この説明では、考古資料が受けた変換作用が強く意識されている。ところが同じ発表の中の、都市や村で消費された陶磁器の総量を考えることの必要性を論じた箇所では、「単位面積当たりの出土量に遺跡全体、町全体の面積をかけた算する方法で、その都市の全体の量を推計して」いる。都市の中にもたらされ消費された陶磁器がその都市から外に出されることなく、すべてその都市内部に廃棄・蓄積されていた場合に限ってこの推計が都市の消費量

であると言えるのであって、実際に推計できるものは「都市で消費された総量」ではなく、「都市に廃棄された総量」とするべきだろう。小野は、中世都市が消費した量のイメージをつかむため「半分まゆつばみたいな話」として紹介したまでのことで、これが発表の論旨に影響することはない。ただ、ここで指摘しておきたいのは、私たちは資料の形成過程や変換作用の存在に気づきながらも、実際の計量分析を進める際にはその存在を忘れているか、あるいはそれほど関心を払っていないということである。

③消費財廃棄の過程

廃棄遺構の状況

前章ではSchifferの研究を紹介しながら、資料の形成過程に関する基本的な考え方を提示した。そこで次に、実際の中世遺跡出土資料を取り上げ、資料の形成過程を検証していくことにする。ここで扱う資料は、私自身も調査に関係した草戸千軒町遺跡の出土資料である。遺跡の詳細については五冊からなる発掘調査報告を刊行しているので、そちらを参照していただきたい〔広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編一九九三・一九四・一九九五a・一九九五b・一九九六〕。

Schifferはか多くの指摘があるように、考古資料とは基本的には廃棄物と考えられるものである。もちろん、墳墓への副葬品や意図的な埋納品、あるいは意図せず井戸の中に落としてしまったようなものは、廃棄したものとは言い難いかも知れない。しかし、どのような事情で埋まったものであれ、地中に埋まることによってその製品は現実の生活の場(Schifferのいう機能的文脈)から切り離され、人々はそれを使用・消費することができなかつたという点では共通している。ちなみにSchiffer

は、意図的な廃棄行為を伴わずに結果として考古資料へと移行したものを、「事実上の廃棄物 (de facto refuse)」と呼んでいる〔Schiffer 1972〕。

草戸千軒町遺跡において、遺物、つまり広義の廃棄物が集中的に出土する場所は、土坑・溝・井戸・池などの遺構である。こうした遺構から多くの遺物が出土する理由の一つとしては、地中深く掘り込まれた施設であるため、後世の改変を受けにくかったことが挙げられる。また、これらの遺構の多くが最終的にごみ捨て坑として利用されたものであることも、多くの遺物が出土する要因になっている。つまり、溝・井戸・池などは本来別の機能をもつ施設として構築されたはずであるが、それらが廃絶される際には廃棄物を処理するための坑として転用されている例が多く確認できるのである。したがって、こうした遺構には集落における消費財廃棄の在り方が集約されていると見なすことができ、その形成過程を分析することは、当時の消費活動を復元するための有効な手がかりとなるだろう。

まず代表的な遺構の例を挙げながら、その堆積状況と廃棄物の出土状況を紹介する。

(a) SK-III0土坑

第二四次調査区で検出した径六・二(七・九m、深さ一・〇(一・二m)の不整形の土坑である(図2-13)。最底部には多量の木質(木製遺物や木材の断片など)を含む青灰色土が、その上に炭・灰層が堆積している。その上には土師質土器を多量に含む黒灰色土が堆積し、さらに暗褐色土が堆積している。この遺構からの出土遺物は遺跡内でも特に多く、土師質土器食膳具の完形品だけでも約三〇〇個体が出土している。破片で出土している土師質土器もその割れ方から本来は完形の状態で埋められていたと考えられ、破片の重量を含めて全体の個体数を推定すると、

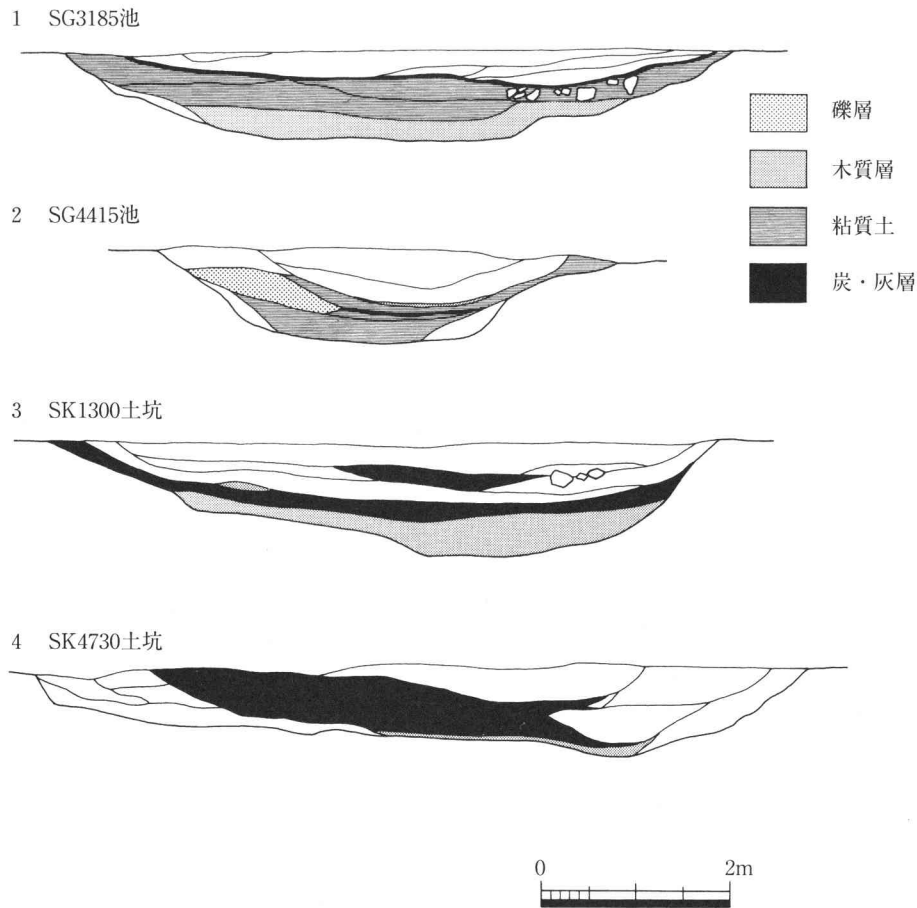


図2 遺構の堆積状況

少なくとも二万個体が存在していたことになる。そのほかに、漆器・曲物・折敷・箸状木製品・下駄・草履状木製品などの木製遺物が九〇〇点ほど、さらに木簡や木札が六〇点ほど、石鍋・砥石などの石製品が約一〇〇点、約二〇〇枚の銭貨などが出土している。

木質層はのちにも述べるように、施設埋め戻し作業の最初に堆積した土層と考えられるものである。木質層の下には堆積層が存在しないことから、廃棄物処理するために掘られた坑が短期間のうちに埋め戻された可能性が高い。廃絶時期は一四世紀中頃である〔草戸千軒町遺跡調査研究所編一九九三〕。

(b) SG三一八五池

第三四・三六次調査区で検出した東西七・〇〜一〇・〇m、南北約一〇・〇m、深さ一・〇mの不整形の池状遺構である(図2-1)。堆積層は大きく三つに分けられ、下層には灰色粘土・暗灰色粘土を主体とする粘土層の堆積があり、木質を含んでいる。中層は灰褐色粘質土を主体とし、上面には炭・灰層の薄い堆積がある。上層は黒褐色土が主体となる出土遺物は特に多いわけではないが、若干の木製品が下層から、土器・陶磁器・石製品などが中・上層を中心に出土している。

この遺構は下層に厚く粘土層が堆積していることから、水の張られた状態がある程度の期間続いたことが想定でき、池として機能していたと判断している。しかしながら、炭・灰層を挟んで、その下に粘土・粘質土系統の土層、その上に砂質土系統の土層が堆積し、木製遺物を除く資材が炭・灰層から上に集中する点では先のSK一三〇〇と共通する堆積過程が確認できる。これは、施設の埋め戻しが同じような手順で行われたことを示している。一三世紀中頃から後半にかけての時期に廃絶された〔草戸千軒町遺跡調査研究所編一九九四〕。

(c) SG四一五池

第四二次調査区で検出した長辺八・二m、短辺八・二m、深さ一・

○mの南北に長い隅丸長方形の池状遺構で、西岸に杭を打ち込んだ護岸施設が存在した(図2-1)。最底面の縁辺部に灰色砂質土、その上に灰色粘質土が堆積しているが、灰色砂質土はこの施設を掘り込んだ直後に周囲の壁が崩れ落ちて堆積したもので、灰色粘質土は施設に水が張られた状態で底部に堆積したものと考えられる。護岸をもち、水が一定期間張られていたことが推定できるため、池として機能していたと判断できる。廃絶時には、まず多量の炭・灰を含む礫層が堆積し、その上に木質層・明褐色粗砂層・灰色砂質土が堆積している。木質層はそれほど厚いものではないが、折敷・箸状木製品・曲物・下駄・草履状木製品・呪符など約八〇点が出土している。遺物が最も多く出土しているのは礫層で、大量の陶磁器片や溶融した緋銭、壁土などが、火を受けた礫とともに出土した。特に陶磁器の出土量が多く、多くは火を受けて小さな破片となっている。炭・灰を含む層から熱を受けた資料が出土していることから、火災に遭った施設の廃棄物を池に埋めることによって処分したものと判断できる。

ただし、推定約五〇〇個体の土師質土器の食膳具は火災に遭った痕跡が明確でなく、ほかの資料とは廃棄された契機が異なっていると考えられる。廃絶時期は一四世紀中頃である(草戸千軒町遺跡調査研究所編一九九五b)。

(d) SK四七三〇土坑

第四三次調査区で検出した径七・〇〜八・三m、深さ一・〇mのほぼ円形の土坑である(図2-4)。最下層には灰色砂質土、その上に木質層が堆積する。灰色砂質土は、構築直後に崩落した土砂であろう。木質層の上には炭・灰層が何層かにわたって厚く堆積し、中にはカメの甲羅(四〇個体以上)をはじめとする動物遺体(獣骨・魚骨・貝)などの食物残滓が多く含まれていた。その上に砂質土系統の土層が堆積する。木製遺物はほとんどが木質層から出土しているが、その他の遺物は炭・灰

層中とその直上あたりに集中している。土師質土器皿の完形品が約一〇〇個体出土し、破片の重量から推定すると少なくとも約四〇〇個体の皿が埋められていたと考えられる。

底面に厚い粘質土層の堆積が認められないことから、坑が掘られた状態で長期間放置されることはなく、食物残滓などの廃棄行為にともなって短期間のうちに埋め戻されたと考えられる廃棄土坑である。一五世紀末を前後する頃に埋め戻されている(草戸千軒町遺跡調査研究所編一九九五b)。

以上、代表的な遺構の堆積状況と遺物の出土状況を紹介したが、遺構の堆積状況から復元できる埋め戻しの手順に、一定のパターンが認められることに注意したい。既に調査報告などでも指摘しているように(広島県草戸千軒町遺跡調査報告書編一九九六、鈴木一九九七)、廃棄物を処理した施設の埋め戻し方法を整理すると、次のような手順が想定できる。

(1) 廃絶する施設の底に、不用になった木製品や木簡、木材の断片、木の葉や枝などを敷く。これは廃棄物の処分であると同時に、次からの作業を効率的に進めるために地盤を安定させることを意図したものである。土木工事の基礎に粗朶を敷く工法と、同様の効果をねらったものと思われる。この段階で形成された土層が、発掘調査時に木質層として検出されることになる。

(2) 施設の中に炭や灰を投入する、あるいはその場で火を焚いた可能性もある。これが炭・灰層を形成する。この炭や灰は、埋め戻した施設の跡から湿気が上がってくるのを防ぐことに目的があると思われる。

(3) 炭・灰層の中あるいはその上に、処分する廃棄物を投棄する。

(4) 炭・灰層を形成させる前後に、土師質土器の完形品を大量に投棄する。

(5) 砂質土を何度かに分けて入れ、地表面を安定させる。これらが、

炭・灰層より上の砂質土層を形成することになる。

遺構によっては手順が若干前後する場合もあるが、おおむね以上のような手順によって施設が埋め戻されていたことが復元できる。前述のように、こうした一連の手順はSK一三〇〇やSK四七三〇のような廃棄土坑として構築された遺構だけに認められる現象ではなく、SG三一八五・SG四四一五のような池や、その他の多くの溝や井戸など数百例に及ぶ遺構でも類似する状況が確認できる。つまり、この集落では施設廃絶の機会が、廃棄物処理の機会をも兼ねていたことになる。さらに、廃絶した施設を放置するのではなく、地盤を安定させるための処置を施しながら埋め戻していることから、施設の廃絶に際してその後の土地の再利用が考慮されていたことも確認できる。

廃棄物の類型

では次に、遺構内に投棄されたさまざまな廃棄物を、その形成要因からいくつかの類型に分けて、それぞれの特徴について考えてみたい。

(a) 施設のライフサイクルにおける位置づけ

まず、施設の構築から廃棄に至るまでのどの段階で廃棄物が投棄されたかによって廃棄物の形成要因を考えると、大きくは三つの段階に分けることができるだろう。

まず一つは、「施設が構築された段階」に投棄されるものである。この段階の遺物はすべての遺構で確認できるわけではないが、典型的な例としては井戸の掘方の中から出土する遺物がある。つまり、井戸側を構築した際の裏込めの埋土中から出土する遺物のことで、これらは井戸の構築段階の廃棄物と見なすことができる。また、施設が改修される際に廃棄物が投棄されることもあるが、これも構築段階の一つのバリエーションと捉えておくことにする。

次の段階は、溝・井戸・池などの「施設が機能していた段階」に投棄

されたものである。具体的な例としては、池の最下層に堆積した粘土層から出土した遺物などを挙げるができる。ただし、この段階での投棄量が多すぎると施設の機能を低下させることにもなり、実際の出土遺物の中に占める割合はそれほど高くはないと考えられる。例えば、井戸や溝が機能している間にごみが投棄されることがあったとしても、施設を存続させるためには、それを取り除くといった保守作業が行われていたものと思われる。

廃棄物投棄のもう一つの段階は、「施設を廃絶する段階」である。遺構の埋没状況から推定できるように、遺構内からまともに出土する遺物の大部分は、この段階に投棄されたものと考えられる。しかもこれらの廃棄物は、長期にわたる何らかの投棄が集積されたのではなく、比較的短期間のうちに集中して投棄された可能性が高い。例えば、SK一三〇〇から出土している土師質土器は、特定の層位に集中しており、何らかにわたって投棄されたことは想定しにくい。また、土器の寸法には強い規格性があり、型式差がほとんど確認できないことから、きわめて近接した時期の製品が投棄されたことが考えられる。同様に、木質層を中心に出土する木製品も、その集積状況などから推測して、施設の廃絶時に一括投棄されたものが多くを占めると考えられる（「下津間一九九六」）。

(b) 消費財のライフサイクルにおける位置づけ

遺構においてまともに出土する遺物の多くが、施設の廃絶時という比較的短い時期に集中的に投棄されたものであることを確認した。それでは、個々の製品の生産・流通・消費の時期も近接しているかという点、必ずしもそのようには考えられない。確かに、一括出土した土師質土器・食膳具の場合は、前述のようにほとんど時期差が認められない。しかし、それ以外の多くの陶磁器には古い段階の製品が含まれていることが一般的で、すべての製品の時期が揃っている遺構の方が稀である。廃棄物に

このような時期差が生じる要因には、消費財のライフサイクルのどの段階で廃棄されたのかという問題や、消費財そのものの性格などが関与していると思われる。ここでは、次のようないくつかの状況を想定してみた。

まず一つは、耐久消費財としての機能を終えた段階の「不用品が廃棄される場合」である。陶磁器の破片、壊れた土・石・木・金属製品などがこの不用品に相当する。これらはいわゆる「ごみ」であり、同じ時期に廃棄されていても、それぞれの消費財のライフサイクルの長短によって、生産時期の異なる製品が混在することになる。ただ、耐久消費財は一般的に繰り返し使用されたのちに廃棄されるものであるため、次に示す消費財よりも古い製品が廃棄されることになるだろう。

次に、限定された回数のみ使用された「消費財が廃棄される場合」がある。具体的には、大量投棄された土師質土器食膳具がこれに相当する。あるいは、箸状木製品などもここに含まれる可能性がある。これらの製品は、施設廃絶の直前に用意され、極めて短い期間の消費によって廃棄されたと考えられる。

土師質土器食膳具の大量投棄については近年さかんに検討が加えられ、細かい点での見解の相違はあるものの、そこに何らかの儀礼性を見いだす立場が主流となりつつある〔藤原一九八八、吉岡一九九四〕。また、草戸千軒町遺跡における事例については筆者が検討を加え、そこにもやはり儀礼性・象徴性が見いだせると結論づけている〔鈴木一九八九a・b、一九九七〕。一方、箸状木製品についても遺構埋め戻しの土層の中から大量に出土する例が多く見られることから、土師質土器食膳具と同様の性格を有していた可能性も考えられるが、詳細な分析は今後の課題である。

施設の廃絶時に消費財として大量廃棄された製品は、機能的には使用可能な製品が廃棄されているという見方もできる。しかし、それらが儀

礼的・象徴的な意味をもっていたことを考慮すると、短期間の消費によってその意味（価値）は既に消却されていたと見るべきであろう。そのような考え方から、これらを消費財（単用財）と位置づける。遺構の埋没年代を知る上で土師質土器の型式編年が有効なのは、一括資料に含まれるさまざまな年代の資料の中で、土師質土器が最も新しい、つまり遺構の埋没年代に最も近い年代を示しているからである。

もう一つの在り方としては、一定期間の使用を経たものの、まだ使えるはずの「有用品が廃棄される場合」が挙げられる。これは、使用途中の耐久消費財が何らかの事情でその利用価値を残したまま廃棄される場合を想定したものである。一例としては、備蓄銭・埋納銭などと呼ばれるものの一部が、こうした在り方を反映しているものと考えられる。草戸千軒町遺跡出土で検出された錢甕SX三三〇〇の場合は、銭の収納状況などから金融業者の金庫としての役割を果たしていたものが、何らかの事情でそのまま放置されたことが想定されており〔福島一九九四a〕、使用途中の消費財が廃棄されたことと見なすことが可能である。この他にも、儀礼的・呪術的な意味合いから有用品が廃棄される場合もあつたと考えられる。

使用可能な製品がなぜ廃棄されるかについては個別の事例に即した研究が必要で、ここで詳しく触れることはできない。ただし、後述するように、社会的な環境が大きく変化した場合には、新しい環境に適応した製品が求められ、それまで使用していた製品が一気に廃棄される可能性のあることが指摘できる。

以上挙げてきたのは加工された製品が廃棄される場合であるが、この他にも「加工途上に生成される廃棄物」を想定しておく必要があるだろう。これらは消費財の加工の段階で生じる廃棄物であり、それ自体が消費財として使用されることのない不用品である。具体的な例としては、鹿角・木材などの断片、鉄滓といった廃棄物を挙げることができる。

ここまで概観してきたように、集落遺跡から出土した遺物は、人間集団の消費・廃棄をめぐるさまざまな活動が要因となって形成されたものである。そこには、人間による文化的作用(cultural formation process)が複雑に反映されていることが確認できる。先にも紹介したように、こうした文化的作用による資料の変換(SchifferのいうC-transform)は、私たちが解明しようとする過去の痕跡を変形させる一因となっている。しかし、文化的変換作用はほかならぬ人間の活動が引き起こした変換作用であり、これもまた私たちに与えられた過去の人間活動の痕跡であることに違いはない。したがって、文化的変換作用それ自体を、分析・検討の対象として扱うことが必要とされるのである。

④集落における搬入と廃棄のモデル

輸入陶磁器の廃棄

資料形成過程の分析を進めるためには、資料に表れたさまざまな現象の背後にある相互に絡み合った要因を個別に検証し、それらを総合化する作業が必要である。しかし、現段階では複数の要因を総合的に考察するまでには作業が進んでいない。そこで、まずその中の一つの現象、「一括資料の中に、どのようにして時期の異なる製品が混在するのか」という問題を取り上げ、そこに反映されている資料形成過程について検討を加えてみたい。

最初に紹介する事例は、草戸千軒町遺跡出土の輸入陶磁器を対象にした計量分析である。分析内容は筆者が既に発表しているが(鈴木一九九五・一九九六)、ここでは改めて資料の形成過程という視点から紹介する。なお、計量データのすべてを紹介することは煩雑になるため、要点の記述だけにとどめる。詳細については既刊の文献を参照していただきたい。

さて、遺構から一括出土した輸入陶磁器の中にさまざまな型式の製品が混在していることは、私たちが遺跡を調査してよく経験することである。想定される生産年代もさまざまで、それらが他の遺物、特に在地で生産された土師質土器などの年代と齟齬をきたすこともしばしばある。しかし、これまでの陶磁器の研究は時期編年への関心が非常に高く、一括資料に含まれるこうした異なった時期の資料は、伝世や混入などといった言葉で片づけられ、いわば資料のノイズとして排除される傾向が強かった。しかし、このような伝世や混入が生じる過程こそが資料の形成過程であり、そこには過去の消費活動の実態が反映されているはずである。そこで、伝世や混入という現象自体を分析の俎上に載せることが必要となってくる。

この問題に取り組むため、草戸千軒町遺跡から出土している総点数一万五千点ほどの輸入陶磁器の中から、埋没時期が明らかにできる主要遺構出土の資料を二・三九一点取り出し、その分類を行った。分類基準としては、これまでの編年研究の成果を参考に筆者が独自に設定した一五のグループを用いている。そして、草戸千軒の集落変遷の七段階それぞれの時期に、分類した各グループがどのような構成比で出土しているか、また、それぞれのグループの構成比が時期ごとにどのように推移しているかを集計した。

この集計結果から、草戸千軒の集落にもたらされた輸入陶磁器のおよその変遷が明らかにでき、これまでの編年研究の成果とは大きく矛盾しないことが確認できた。しかし同時に、出土量のピークを迎える時期が、博多や大宰府などの調査成果をもとに考えられているよりも遅れるグループが多いことも明らかになった。例えば、大宰府分類による龍泉窯系青磁Ⅲ類に相当するグループは、博多・大宰府では一三世紀後半から一四世紀初頭に出土量のピークがあり、以後は減少すると言われている(横田・森本・山本一九八九)。ところが、草戸千軒ではそれより遅れて

一四世紀前半(草戸千軒におけるⅡ期前半)にピークがある。また、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類の中でも無文や画花文のもの、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類などは、草戸千軒の町が成立した一三世紀中頃には既にピークを過ぎていたと考えられているグループで、一三世紀後半以降は次第に出土比率を下げているのであるが、どういうわけか一四世紀中頃(草戸千軒におけるⅡ期後半)になって再び出土比率が増加するという特異な変化を示している。草戸千軒の町におけるこれらの特徴的な出土状況の要因を解明し、消費活動の実態に迫るための一つの方法として「搬入と廃棄のモデル」を設定し、これに基づいて資料形成過程の分析を試みた。

(a) モデルの設定

モデルの説明に移る前に、分析対象としている資料の特質をめぐる三つの前提を整理しておこう。

まず、輸入陶磁器が耐久消費財であるという前提がある。つまり、消費財としての価値が一定期間持続し、その間繰り返し使用することが可能であるという特質をもっている。もちろん個別の製品によって価値の持続する期間は異なるが、破損などの事故がない限り、一度の使用によってその価値が消却されることはない。

次に、対象とする資料、つまりここでは出土した輸入陶磁器であるが、これが廃棄物だという前提がある。これについては既に述べてきているように、意図的な廃棄活動を伴わない場合でも、機能的文脈から考古学的文脈へと移行したすべての製品が廃棄物として位置づけられる。

そして、遺構埋土から出土した遺物の年代によって決定された遺構の年代は、その廃絶時期を示しているという前提がある。遺構の年代は、ほとんどの場合大量に出土した土師質土器食膳具の型式編年により決定しているが、前述のとおり、この年代は出土資料の中では最も新しい年代を示しており、遺構の廃絶年代に近い年代を示していると判断できる。したがって、この年代には遺構の構築年代は全く反映されていない。

このような前提をもとに、集落にもたらされた輸入陶磁器がどのように廃棄され、考古資料が形成されていくかを考えると、次のようなモデルが設定できる。

まず、遺構埋土から出土した輸入陶磁器は、その施設が構築されてから廃絶されるまでのある時点で廃棄されたものと考えることが可能である。その場合多くの資料は、施設の廃絶時期に廃棄された可能性が高い。また、その時点で廃棄できる製品とは、当然のことながら人々がその時点で保有していた製品の一部である。そして、その時廃棄されなかった製品があれば、その後の日常生活の中で使用、あるいは保管され、次の段階へと相続されることになる。相続された製品は次の段階で廃棄されることもあるだろうし、さらに次の段階へと相続される可能性もある。私たちが現在「伝世品」と呼ぶような陶磁器は、この相続が長い期間にわたって続いたものである。

このプロセスを数量化し、表にしたものが表1である。「搬入量」の行は集落にもたらされた製品の量を示し、次の「保有量」はその時点で保有されていた量を示す。この保有量のうち、次の時期へと相続される部分が「相続量」で、その残りが遺構に廃棄される「廃棄量」を示している。「搬入量」「保有量」「相続量」は機能的文脈のもとにおかれている製品の量、「廃棄量」は考古学的文脈に移行した製品の量と表現することもできる。そして、私たちが発掘調査によって手に入れることができるのは、いちばん下の行に示された廃棄量の中の一部ということになる。

仮に、ある型式の製品が二〇という量搬入され、それ以前にはこの型式の製品がもたらされていなかったとすると、その段階の保有量は二〇となる。このうち、製品の破損などによって廃棄される割合が三〇%だと仮定すると、残りの七〇%、すなわち一四という量は次の段階へと相続されることになる。次の段階になって一〇という量が搬入されたとす

表1 搬入と廃棄のモデル

時期	PHASE 1	PHASE 2	PHASE 3	PHASE 4
搬入量	20	10	0	0
保有量	20	14+10=24	16.8	11.8
相続量	20×0.7=14	24×0.7=16.8	16.8×0.7=11.8	11.8×0.7=8.3
廃棄量	20×0.3=6	24×0.3=7.2	16.8×0.3=5.0	11.8×0.3=3.54

ると、前段階から相続した一四と、この段階に搬入された一〇とを加えた二四がこの段階での保有量になる。さらにこのうちの三〇%が廃棄され、七〇%が相続されるとすると、次の段階には一六・八が相続されることになる。

以上が、「搬入と廃棄のモデル」に関する考え方である。実際にはより多くのパラメータが介在するはずであるが、基本的には、製品が供給される量、捨てる量、捨てずに残る量という三つの要素によって、遺物の埋蔵量の増減が規定されると考えられる。なお、表に示した数値は抽象化したモデルに具体性をもたせるために示したもので、保有量の七〇%が相続されることが確認できているわけではない。保有量の一部と表現しただけでは説明しにくいので、七〇%という数値をあてはめたに過ぎない。重要な点は、ここに示された数値ではなく、搬入から廃棄に至る消費のプロセスに関する考え方である。

(b) 廃棄量変化のパターン

「搬入と廃棄のモデル」に基づき、ここに代入する数値を変えてみると、いくつかの廃棄量の変遷のパターンを再現することができる。これを実際の出土資料の集計結果と比較すれば、廃棄量変遷の要因についての手がかりを得ることができるとができる。

表2 (図3) はその一つの例で、PHASE 1 という時期に一〇〇という量の製品がもたらされ、その後は同型式の製品が全く搬入されなくなるという状況を想定している。ここでも、保有量の七〇%が相続され、三〇%が廃棄される

と仮定している。この場合の廃棄量の変化をみると、PHASE 2 以後は製品の搬入が全く途絶えているにもかかわらず、二一・一五、一〇・七、五、四というように次第に減少しながらも、かなりのこの段階まで出土する状況が再現できる。この例のように、流通時期が限定できる製品というのは、時期決定の根拠として利用しやすいものであるが、これだけでは時期が決定できないことが示されている。

次に、搬入時期に若干幅がある状況を想定してみる。表3 (図4) がその例で、出現時期にはそれほど多くは搬入されないが、時期とともに搬入量が増加し、やがて減少するというモデルである。PHASE 1 には一〇が搬入され、PHASE 2 に五〇というピークがあり、PHASE 3 で三〇に減少している。これまでの例と同様に相続率が七〇%、廃棄率が三〇%である。ここで注目されるのは、搬入量のピークがPHASE 2 にあっても、廃棄量のピークはPHASE 3 にあるという時期のずれである。先に、草戸千軒町遺跡における龍泉窯系青磁Ⅲ類の出土のピークが、博多・大宰府などで確認できる時期よりも遅れていることを指摘したが、その原因の一つがこうした現象に求められるのではないだろうか。つまり、特定型式の廃棄量がピークを迎える時期は、その型式が流通経路でピークを迎える時期よりも遅れる傾向のあることが確認できる。

このあたりの状況をさらに追求するために、表4 (図5) のようなモデルを想定してみた。ここでは、廃棄率を七〇%に高めている。これは、博多・大宰府のような陶磁器輸入の門戸に位置している遺跡では、製品が流通経路に出回ると近接した時期に、かなり高い割合で製品が廃棄されることが予想されるからである。具体的な資料としては、博多遺跡群の店屋町の調査で確認されているような(池崎・森本一九八三・一九八八、浜石・菅波・林田一九九三)、陸揚げ直後の製品を廃棄したと考えられる土坑の出土遺物などを挙げることができる。このモデルをみると、先の場合とは異なって、搬入量と搬入量のピークは同じ時期に重なって

表2 古い製品が残るモデル

時期	PHASE 1	PHASE 2	PHASE 3	PHASE 4	PHASE 5	PHASE 6	PHASE 7
搬入量	100	0	0	0	0	0	0
保有量	100	70	49	34	24	17	12
相続量	70	49	34	24	17	12	8
廃棄量	30	21	15	10	7	5	4

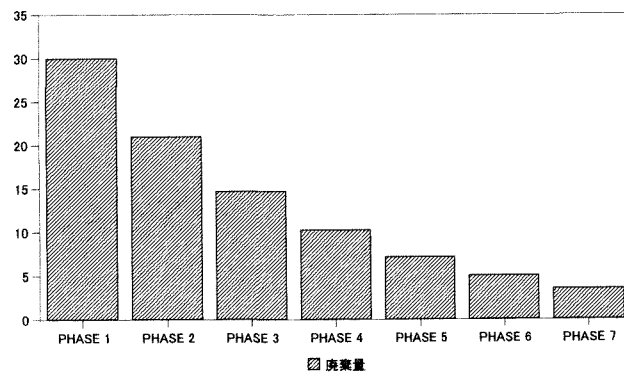


図3 古い製品が残る状況

表3 搬入量と廃棄量のピークがずれるモデル

時期	PHASE 1	PHASE 2	PHASE 3	PHASE 4	PHASE 5	PHASE 6	PHASE 7
搬入量	10	50	30	0	0	0	0
保有量	10	57	70	49	34	24	17
相続量	7	40	49	34	24	17	12
廃棄量	3	17	21	15	10	7	5

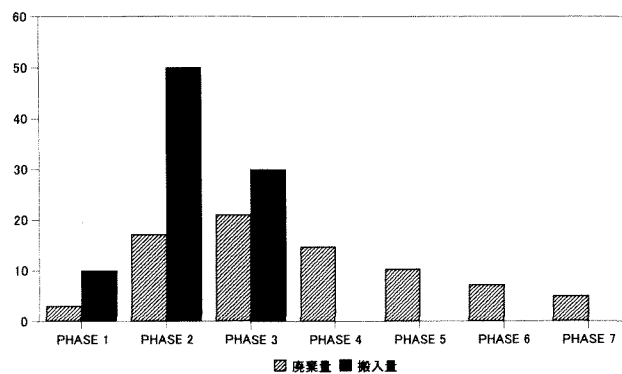


図4 搬入量と廃棄量のピークがずれる状況

表 4 廃棄率の高いモデル

時期	PHASE 1	PHASE 2	PHASE 3	PHASE 4	PHASE 5	PHASE 6	PHASE 7
搬入量	10	50	30	0	0	0	0
保有量	10	53	46	14	4	1	0
相続量	3	16	14	4	1	0	0
廃棄量	7	37	32	10	3	1	0

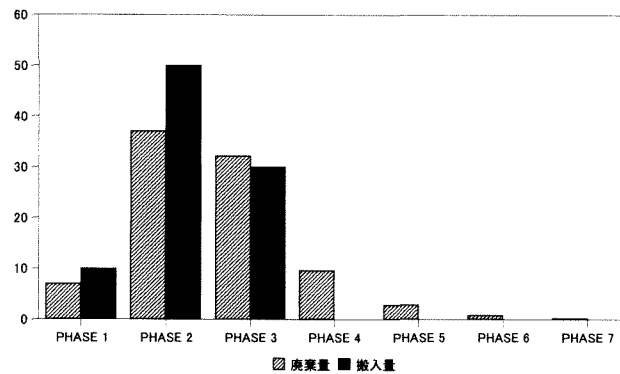


図 5 廃棄率の高い場合

いる。同時に、ピークの後の廃棄量が急激に少なくなっており、製品の多くがより早い段階で廃棄されることによって、新しい段階まで残る比率が低下することも示されている。

つまり、製品の廃棄状況が異なっていたことを想定すれば、製品の流通時期に差がなくても廃棄量のピークがずれてくるということが説明できるようになる。博多・大宰府のような陶磁器輸入の門戸に位置する集落では、次々と新しい型式の製品がもたらされるのに対し、草戸千軒のような流通経路の末端近くに位置する集落では、一定期間使用されたのちに製品が廃棄される傾向が高く、型式の入れ替わる速度が緩やかだったことを示すものと考えられる。

さて、ここまで想定してきたのは、各時期を通じて相続率・廃棄率が変化しない場合であった。しかし、時期によって廃棄率が変動することも十分に考えられる。そこで、表 5 (図 6) のようなモデルを想定してみた。ここでは PHASE 4 にだけ 60% という廃棄率を与え、その他の時期を 30% に設定している。当然のことながら PHASE 4 の廃棄量が増えてくるが、同時に、PHASE 4 で多くの製品が廃棄されるために、次の PHASE 5 の廃棄量が急激に低くなるという現象も確認できる。先にも触れたように、草戸千軒遺跡の出土資料の中でこれによく似た現象が確認できるのが、集落が成立した一三世紀中頃には既に流通のピークを過ぎていたと考えられる龍泉窯系青磁碗Ⅰ類の中の無文・画花文のグループ、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類などのグループである。いずれもいったん減少した出土比率が一四世紀中頃から一五世紀前半にかけて増加し、一五世紀後半には再び少なくなっている。したがって、このモデルに沿って考えると、草戸千軒の集落では一四世紀中頃に輸入陶磁器の廃棄率が高くなっていたことが想定できるようになる。

それでは、この時期の集落で輸入陶磁器の廃棄率が高くなるような事情が確認できるのだろうか。その点を検討してみよう。

表5 PHASE 4の廃棄率だけ高いモデル

時期	PHASE 1	PHASE 2	PHASE 3	PHASE 4	PHASE 5	PHASE 6	PHASE 7
搬入量	100	0	0	0	0	0	0
保有量	100	70	49	34	14	10	7
相続量	70	49	34	14	10	7	5
廃棄量	30	21	15	21	4	3	2

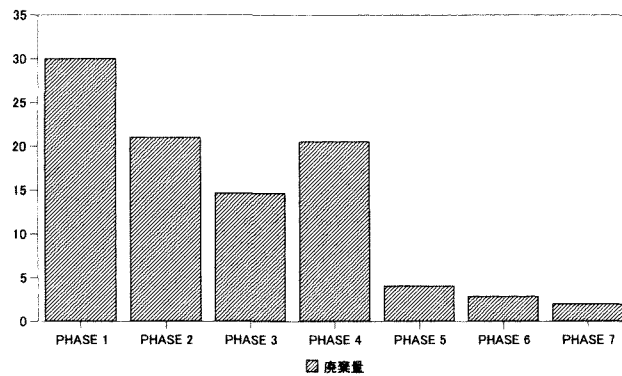


図6 PHASE 4の廃棄率だけ高い場合

(C) 消費財が廃棄される契機

ここで再び、現在の私たちの生活に例を借りて考えてみる。私たちの生活の中で、ここで問題にしているような耐久消費財が集中的に廃棄されるのはどのような場合だろうか。

例えば身のまわりの道具が壊れて使えなくなった場合、私たちはそれを廃棄するだろう。しかし、通常の状況では特定の時期に集中的に製品が壊れることは考えにくい。ただし、火災や地震といった災害があれば、製品が集中的に壊れる可能性は高くなる。また、製品が壊れたからといって、すぐにそれを廃棄するとも限らない。ところが、転居とか家の建て替えなどがあれば、そうした不用品をまとめて廃棄する可能性は高まるだろう。このように考えると、集落において何らかの「変革」、つまり災害や転居、あるいは建物の建て替えなど、それまでの生活環境が大きく変わる出来事があった場合には、耐久消費財の廃棄行為が促進されることが想定できる。廃棄率が特定の時期に高くなるという現象の背後には、こうした変革が存在していたのではないだろうか。

このあたりの状況を示す身近な例として、筆者の勤務する広島県立歴史博物館の沿革と、そこで使われていた備品について紹介してみたい。

表6に示すように、広島県立歴史博物館は一九七三年に設置された草戸千軒町遺跡調査所が母体となっている。これは広島県教育委員会事務局文化財保護室の分室として設置されたもので、福山市花園町の旧福山保健所跡の建物を利用していた。その後、組織は県教育委員会の付属機関となり、名称も広島県草戸千軒町遺跡調査研究所と改称された。やがて、一九八三年には博物館建設予定地である旧県立葦陽高校跡の建物に移転する。さらに一九八九年の四月に、新築された現在の博物館の建物に移転し、その年の十一月に博物館が開館している〔広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編一九八三、広島県立歴史博物館編一九九九〕。

博物館の前身である研究所は二度の移転を経験しているが、この間、

表6 広島県立歴史博物館の沿革

名称	年月	建物	所在地
草戸千軒町遺跡調査所	1973年5月	旧福山保健所跡 (1973年5月～)	広島県福山市花園町1-5-2
草戸千軒町遺跡調査研究所	1975年4月		
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	1976年4月	旧県立葦陽高校跡 (1983年3月～)	広島県福山市西町2-4-1
広島県立歴史博物館	1989年11月	県立歴史博物館 (1989年4月～)	広島県福山市西町2-4-1

庁舎で使用していた備品が集中的に廃棄処分されたのは庁舎移転の時であった。例えば、旧保健所跡に調査所が開設された際、それに合わせていくつかの備品が購入されたが、一部は旧保健所の備品を所管換えして利用していた。それから旧保健所の備品は保健所跡で業務を行っている間にはほとんど廃棄されることはなかったが、葦陽高校跡地に移転する際に一部が廃棄された。またその際廃棄されなかったものは、葦陽高校跡の庁舎でも引き続き使用された。さらに新築の博物館に移転する際には、古くて汚れているため新庁舎にはふさわしくないといった理由で、大部分が廃棄された。それでも、現在博物館で利用している備品の中には、ごくわずかではあるが未だに旧保健所時代の備品が含まれている。

この実例で確認できる点は、庁舎の移転という環境の変化を機会に多くの廃棄物が処分されていることである。また、「搬入と廃棄のモデル」によって提示した古い時期の製品が相続されていく状況も確認できる。庁舎で使われる備品は耐久消費財に区分できるもので、消費財としての価値が消却されるまでにはかなりの年数を要する。通常の使い方をする限り、そう簡単に壊れるものではない。したがって、その製品が生産され、市場に流通している時期よりものちになってからの方が廃棄される頻度は高い。そして環境の変化を契機として、相続されてきた古い製品が集中的に廃棄されることになるのである。

このようなモデルを草戸千軒の集落にも適応するならば、先に示した白磁碗Ⅳ・Ⅴ類や龍泉窯系青磁Ⅰ類の廃棄率が一四世紀中頃に高くなる現象は、一つには古い段階の製品

がこの時代まで保有され続けていたことを示すものと言えるだろう。同時に、一四世紀中頃の段階に集落に大きな変革が訪れ、旧来の製品を一気に廃棄させる契機となったことも理解できるようになる。

草戸千軒の集落において一四世紀中頃に大きな変革があったことは、遺構の変遷過程からも明らかにされている。(福島一九九四、岩本一九九六a・b)。草戸千軒の集落の変遷は表7のような七つの段階で捉えられており、図7に遺構変遷の概略を示した。まず、Ⅰ期前半から後半の段階では中心区画と呼ばれる区域を核として方形の区画がいくつか展開し、南側には自然流路など未開発の区域が広がっている。それがⅡ期前半から後半にかけての段階には南側区域の開発が進み、そこに東西に細長い短冊形の区画が展開するようになる。ところが、Ⅱ期後半には大部分の施設が埋め戻され、短冊形の区画も消滅することになる。次のⅢ期からⅣ期にかけては中心区画は引き続き存続するものの、内部の施設の多くが作り替えられ、やがてこの部分に柵で囲まれた区画が整備されていく。また集落南部には、Ⅳ期後半になって濠で囲まれた方形の居館も成立している。このうちのⅡ期後半における変化が集落変遷の上では最も大きな変化で、その時期が一四世紀中頃に比定できるのである。

表7 草戸千軒町遺跡における時期区分

時期	暦年代
Ⅰ期前半	13世紀中頃から後半
Ⅰ期後半	13世紀後半から14世紀初頭
Ⅱ期前半	14世紀前半
Ⅱ期後半	14世紀中頃
Ⅲ期	15世紀前半から中頃
Ⅳ期前半	15世紀後半
Ⅳ期後半	15世紀末から16世紀初頭

I期(前・後半) → II期(前・後半) → III~IV期(前・後半)

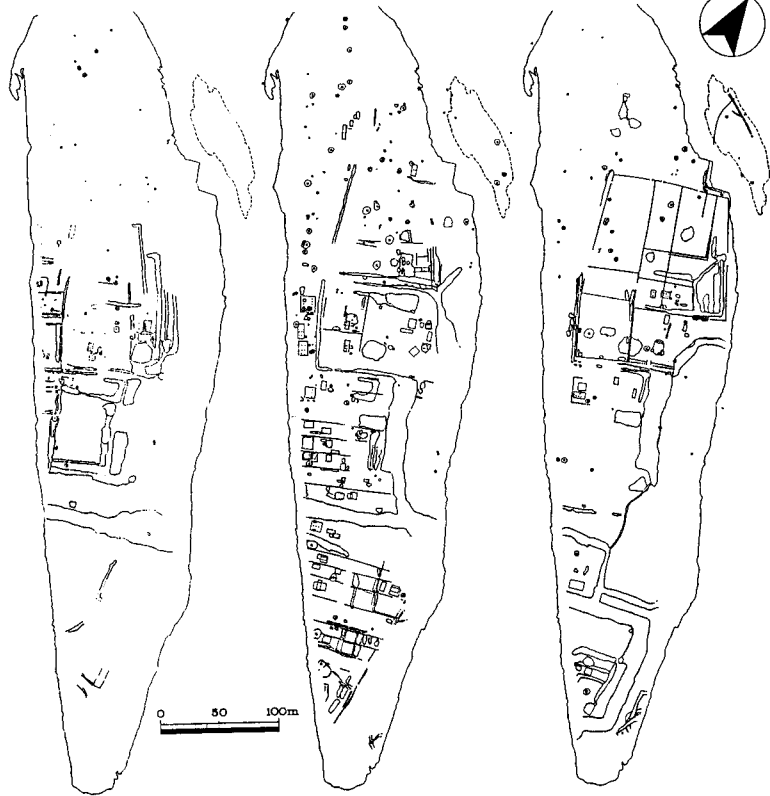


図7 草戸千軒町遺跡における遺構の変遷

町の区画を改変するという事業は、それまで利用していた施設を廃絶し、新たな施設を再配置する事業である。旧来の施設の廃絶に伴って、そこで使われていた、あるいは保管されていた消費財が廃棄されることは十分に考えられる。一四世紀中頃の草戸千軒の集落においてそうした事業が展開され、人々の生活環境が大きく変化したことが、この時期における廃棄率の高まりの背景にあったと判断できる。

滑石製石鍋と木製食膳具の廃棄

前項では輸入陶磁器を例に挙げ、一括廃棄された資料の中にさまざまな時期の製品が混在する状況がどのように形成されてくるのかを分析したが、ここでは若干の事例を追加することによって、前項で確認したことを補足しておきたい。

(a) 滑石製石鍋の廃棄

滑石製石鍋は中世前半期を中心に、特に西日本において多く利用された煮炊具である。出土量は九州北部から瀬戸内地域・近畿地方が多いが〔木戸一九九五〕、瀬戸内海を経由して鎌倉に至る流通ルートによって東日本にももたらされていた〔馬淵一九八七〕。原産地は九州北部から瀬戸内西部にかけての地域で確認されているが、圧倒的多数は長崎県の西彼杵半島一帯で生産されたものと考えられている。滑石が鍋として利用された理由は、保温性などの点で他の材質にはない特質がある上に、柔らかく加工しやすい素材だったからだろう。遺跡から出土する石鍋は破片となって出土するものがほとんどで、中には温石・石錘・硯・スタンブなどに再加工されている例も確認できる。また、煮炊具として利用されたことは、煤の付着や加熱による石材の変質といった痕跡で確認できる。漆による補修の跡を残す資料も存在しており、繰り返し使用する耐久消費財であったと考える問題はないだろう。

草戸千軒町遺跡出土の石鍋については、木戸雅寿によって型式分類が行われている〔木戸一九八二〕。その後『発掘調査報告』を刊行する過程で遺跡全体の出土資料の整理を進め、その成果をもとに『草戸千軒町遺跡出土の滑石製石鍋』を刊行した〔広島県立歴史博物館編一九九八〕。そこに掲載したデータに基づきながら、草戸千軒の集落における石鍋の搬入と廃棄の状況を概観する。

草戸千軒町遺跡からは、滑石製の石鍋とその加工品が二一七一点出土

表8 草戸千軒町遺跡における石鍋の出土状況

時期	型式	第1型式	第2型式	第3型式	第4型式	第5型式	第6型式	第7型式	第8型式
I 期 前 半		0	6	0	1	0	0	0	0
I 期 後 半		0	11	14	0	0	0	0	0
II 期 前 半		0	4	5	12	1	1	0	0
II 期 後 半		0	5	8	21	57	17	3	0
III 期		0	0	9	4	3	3	2	0
IV 期 前 半		0	0	0	1	3	1	2	0
IV 期 後 半		0	1	3	1	3	2	1	0
計		0	27	39	40	67	24	8	0

※時期の確定できる遺構から出土している各型式の点数

している。このうち、出土遺構の埋没時期が確定でき、かつ資料の型式が明らかでない資料は二〇五点ある。表8には、それぞれの時期における各型式の石鍋の出土点数を示した。時期は草戸千軒における集落変遷の段階を示し、石鍋の型式は木戸の型式分類をもとに、新たに第1型式から第8型式として割り当てたものを表示している。

この表では、それぞれの時期に最も多く出土している型式を太字で示しており、これとみるとI期前半からII期後半までは分類した型式を順次推移していることが確認できる。つまり、I期前半には第2型式、I期後半には第3型式、II期前半には第4型式、II期後半第5型式というように、各時期で出土点数の最も多い型式は順次新しい型式へと推移している。したがって、一三世紀中頃から一四世紀中頃にかけての段階には、草戸千軒の集落に順次新しい型式の石鍋がもたらされていたと見なすことができる。III期以降の型式の推移が不明確になるのは、一四世紀後半以降石鍋の流通量が急速に減少する全国的な動向に対応するもので、草戸千軒への供給量も不安定になったことを反映するものであろう。この状況を確認するために、遺跡から出土している型式分類可能なすべての石鍋の点数を示したものが図8である。このグラフからは、

第1型式から第5型式まで次第に石鍋の搬入量が増加するものの、第6型式以降搬入量が激減したことが示されており、先に想定した流通量の変化を確認できる。

次に、集落にもたらされた石鍋がどのように廃棄されたかを確認するため、時期別の出土点数をグラフに示したのが図9である。これとみて気づくのは、II期後半に廃棄された量が非常に多いことである。時期が確定できる出土資料の半数、五一%がこの段階に廃棄されている。これは、この段階にもたらされた石鍋の量が多かったことを反映しているとは考えられない。確かに図8が示すように第5型式の出土量は多く、この型式はII期前半になって初めて出土するようになることから(図10)、一四世紀前半から中頃にかけての時期に集落にもたらされた型式だと考えられる。しかし、第5型式には及ばないまでも、第3・4型式もそれなりの量が出土している。それにもかかわらず、II期後半に集中的に石鍋が廃棄されていることは、この段階以前にもたらされ、この段階まで相続されてきた石鍋が、この段階にもたらされた石鍋とともに一気に廃棄されたような状況を想定させる。やはり、前項で検討したような消費財の廃棄を促進させる契機、つまり遺構配置の変化に示されるような変革がその背景にあるものと判断できる。

(b) 木製食膳具の廃棄

続いて木製食膳具の廃棄状況にも触れておきたい。草戸千軒町遺跡出土の木製食膳具については、下津間康夫によってその概要がまとめられており(「下津間一九九六」)、ここでは主にそのデータに基づいて検討を加えることにする。

遺構に大量に投棄されている木製食膳具としては、箸状木製品・折敷がある。また、必ずしも大量とは言えないものの、漆器も出土している。このうち箸状木製品の出土量の多さが目立ち、五二の遺構において一〇〇本以上(破片の長さから推定した本数)が出土している。そのため、

土師質土器食膳具と同様に、消耗財として何らかの儀礼性・象徴性をもつて投棄されていた可能性も考えられる。また折敷の場合は、一〇〇点（破片の点数）以上がまとまって出土する遺構が六例ほど確認できる。表9には、箸状木製品・折敷・土師質土器食膳具が大量に出土している代表的な遺構とそれぞれの出土点数をまとめたが、ここでもやはりⅡ期後半に多くの製品が集中的に廃棄された状況が示されている。表に掲載されていない遺構を含めると、箸状木製品の場合は一〇〇本以上出土している五二の遺構のうち二九がⅡ期後半に廃絶されたものである。折敷の場合は、五〇点以上出土している一四の遺構のうちⅡ期後半のものは九遺構を占めている。

箸・折敷・かわらけのセットは、言うまでもなく儀式・宴会などに用

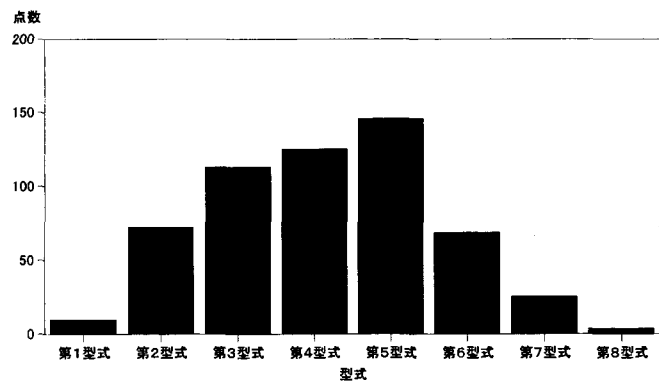


図8 草戸千軒町遺跡における石鍋の型式別出土点数

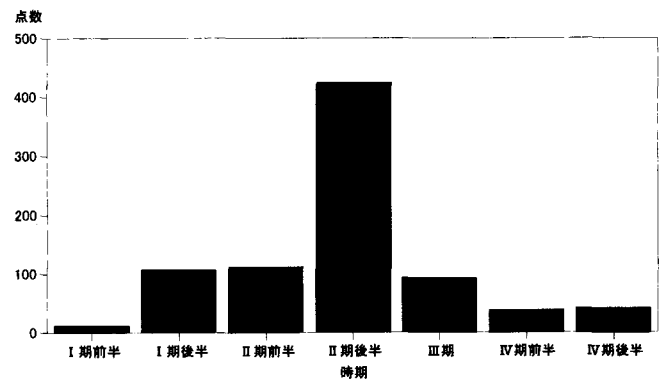


図9 草戸千軒町遺跡における石鍋の時期別出土点数

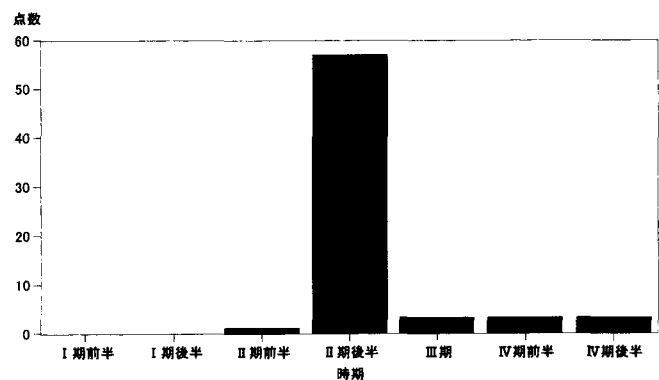


図10 第5型式の時期別出土点数

いられた食膳具のセットで、これらを宴会に伴う廃棄物と位置づけることも不可能ではない。ただし、これはあくまでも可能性の一つであって、三者がセットで出土するからといって、ただちに宴会の廃棄物と結論づけられるわけではない。その理由の一つは、土師質土器や箸状木製品には消耗財としての性格は認められるものの、折敷にはその性格が明確には示されていないことである。折敷は完形品として出土することはほとんどなく、使用痕を残す資料も多い。宴会のために用意され、一度限りの使用で廃棄されたものとは考えにくいのである。また、先に遺構の埋没状況を説明した際に触れたように、木製品と土師質土器とは同一層からまとまって出土するのではなく、多くの場合は木製品は木質層に、土師質土器はそれより上位の土層にそれぞれ集中して廃棄されている。例

表9 食膳具が大量に廃棄された遺構

遺構	時期	箸状木製品	折敷	漆器	土師質土器
SK1300	Ⅱ期後半	10333	358	99	2972
SG1791	Ⅱ期後半	1348	317	38	633
SK1890	Ⅱ期後半	3681	220	14	115
SK582	Ⅳ期前半	314	169	22	172
SG3060下層	Ⅱ期後半	123	118	57	248
SG2740下層	Ⅱ期後半	134	101	31	215
SE3275	Ⅰ期前半	1486	99	31	89
SG2741	Ⅰ期後半	954	80	47	292
SK1825	Ⅱ期後半	287	79	6	0
SD3190最下層	Ⅰ期前半	517	76	12	45
SK3456	Ⅱ期後半	1467	71	11	149
SD550	Ⅳ期前半	860	60	37	602
SK1370	Ⅱ期後半	756	58	32	722
SD520	Ⅱ期後半	1180	54	24	61

※箸状木製品は推定本数、折敷は破片数、漆器は件数、土師質土器は碗皿類の完形品の個体数を示す。

例えばSK一三〇〇の場合、箸状木製品・折敷はほとんどが木質を大量に含む青灰色土層から出土しているのに対し、土師質土器は黒灰色土層を中心に出土している。宴会に使用した食膳具のセットをまとめて無造作に投棄したというよりは、埋め戻しの手順に従って作業を進めることが強く意識されていたことがうかがえる。

箸状木製品や折敷ほどには大量に出土しないものの、漆器が出土する遺構も多い。漆関連の資料は遺跡全体で一七六九件確認でき、このうち漆紙や漆塊を除いた食器類が一二三四件存在している⁵⁾。これらの点数を時期別に示したものが図11のグラフである。ここでもやはりⅡ期後半の資料が圧倒的に多く、全体の四八%を占めている。漆器は耐用年数が長

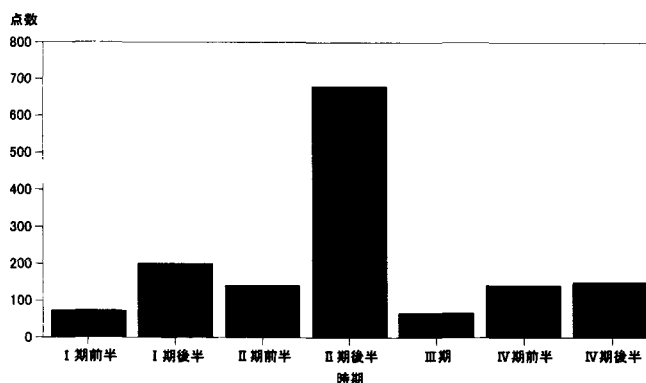


図11 草戸千軒町遺跡における漆器の時期別出土点数

く、何度も繰り返し使用することが可能な耐久消費財である。先ほどの石鍋の場合と同様に、漆器も通常の状態ではそれほど多くの製品が廃棄されることはなく、多くは次の時期へと相続されていたのではないかと思われる。にもかかわらず、Ⅱ期後半に集中的に廃棄されている状況は、この時期に生じた変革の大きさを物語っている。

滑石製石鍋と木製食膳具の出土状況を概観し、Ⅱ期後半の廃棄量が増加する状況を概観した。先に記したように、Ⅱ期前半からⅡ期後半にかけては集落の居住区域が南側へと拡大する時期に相当しており、それに伴って集落の人口や消費量が増加したことが当然考えられる。廃棄量増加の背景にそうした居住区域の拡大があったことは否定できないが、Ⅱ

期後半に多量の廃棄物が認められる遺構の多くは、遺跡南半の新たな居住区域ではなく、中心区画を核とする遺跡北半部に位置している。このことは居住区域の拡大だけが廃棄量増加にストレートに結びついたのではなく、Ⅱ期後半における廃棄活動そのものが、集落全体で活性化化したことを示している。その背景として、先に述べたような集落における施設の大規模な改変を位置づけることができる。

⑤草戸千軒における消費活動の特質

今回の分析によって明らかになった草戸千軒における消費活動の特質をまとめるとともに、そこから考えられる都市における消費の特質についても若干触れておきたい。

草戸千軒が都市と呼べるかどうかの議論はさておいて、この集落が地域の経済拠点として機能していたことは間違いないだろう(「岩本 一九九六」)。地域の経済拠点とは、一定の広がりをもった地域社会の内部で分散的に保有されていた経済的諸機能が、効率化・高度化を図るためにある特定の場所に集約されたものと捉えることができる。したがって、ここでは人間のさまざまな活動が集約化・高密度化されると考えられる。例えば、人々の集住が進むことにより人口密度や消費活動の密度も高くなり、廃棄物の量や密度も多くなるという現象が確認できるはずである。そうした経済的諸機能の集約化が達成された場所が「町」であり、その規模の大きなものを「都市」と考えておきたい。

そこで、草戸千軒における消費活動の特質を集約化・高密度化といった視点から評価することによって、この集落にどの程度「町」あるいは「都市」としての特質を見いだすことができるかを検討する。

(a) 施設の廃絶と消費財の廃棄

草戸千軒町遺跡の出土資料の特徴の一つは、大部分の資料が施設埋め

戻しの埋土の中から出土していることである。これらの施設には廃棄土坑として構築されたものもあるが、それ以外の施設が廃棄土坑に転用されたものも多い。廃棄土坑の正確な数は把握できていないが、遺跡全体で四九三基確認できている土坑の多くは、構築後短期間のうちに埋め戻されたかと判断されており、当初から廃棄物を処理するための土坑として構築された可能性が高い(草戸千軒町遺跡調査研究所編 一九九六)。この数を多いとみるか少ないとみるかは現在のところ判断できないが、こうした廃棄土坑以外の溝や池なども廃棄物の投棄に利用している状況からは、通常の廃棄土坑だけでは廃棄物の処理が追いつかなかったと考えることもできる。つまり、さまざまな施設の廃絶の機会をとらえて廃棄物を処理しなければならぬほどに廃棄物が多かったということ、そこにはこの集落の消費量の大きさがうかがえる。

また、施設廃絶には一定の手順が認められ、廃棄物の投棄はその手順の一環に組み込まれていることにも注目したい。つまり、この集落では施設廃絶と廃棄物処理とが結びつき、一つのシステムとして機能していたのである。これは見方を変えれば、井戸や溝などを含む集落の中の坑は最終的にはごみ捨て坑として利用することを前提に存在していたことになる。ごみ捨て坑に位置づけられていたから捨てたままで、必ずしも廃棄土坑の不足を意味するものではないと考えることもできる。しかし、それだけ多くの施設を充たすだけの廃棄物が存在したことは確かであり、一定レベルの消費量があったことは否定できないだろう。

(b) 集落内への廃棄

この集落では、廃棄物が集落内で処分されている。集落外における廃棄物処理の状況は発掘調査が及んでいないため明らかではないが、すべての廃棄物が集落外へと排出されていなかったことだけは確かである。また、廃棄土坑は集落内のそれぞれの区画の縁辺部に位置することが多く(草戸千軒町遺跡調査研究所編 一九九六)、それぞれの屋敷内の廃棄物

がその屋敷内の空閑地で処理されていた可能性が高い。このことは、屋敷外への廃棄に対して何らかの規制があったことを予想させるが、集落外廃棄の実態がわからない現段階では、その評価は今後の課題としたい。いずれにせよ、一定量の廃棄物が限定された空間内で処理されていた状況は認められる。廃棄土坑以外の施設がごみの処理に利用されていることも、限定された空間内で廃棄物を処理することの必要性から行われていたとも理解できる。その意味では、集落内での廃棄活動は密度が高かったと考えられるのである。

その一方で、別の区画に属すると思われる複数の遺構の間で接合する資料も確認できる。一例としては、SK一三七〇という廃棄土坑から出土した常滑大甕がある〔草戸千軒町遺跡調査研究所編一九九四〕。この資料には多数の破片が接合しているが、破片の出土地は周辺の複数の遺構にも分散している。特に多いのが、SK一三七〇の南方二〇mほどにあるSG一七九一という池状遺構から出土した破片である。両遺構はともにⅡ期後半に廃絶しているが、両者の間には溝(SD五七〇)とそれに沿う道路(SC六〇一五)が存在することから、別の区画に属していたと判断できる。このことから、両区画を含む一帯が同じ時期に一気に更地に戻され、その際にどちらかの区画で利用されていた大甕の破片が分散して投棄されたことが想定できる。これは、施設廃絶がそれぞれの区画内の事業として個別に行われたのではなく、区画の枠を超えた「公共事業」として進められた可能性を示している。SK一三七〇・SG一七九一はいずれも規模の大きな遺構であり、単に屋敷内の廃棄物を処理するだけでなく、「公共事業」のための施設として位置づけられていた可能性もある。また、Ⅱ期後半における廃棄量増加の要因として、集落における何らかの改変の存在を想定したが、ここに見られるような大規模な事業がそれに比定できるだろう。

(c) 土地の利用効率

草戸千軒の集落においては、大部分の施設が廃絶時に一定の手順によって埋戻されており、廃絶後に放置され自然に埋没した状況が観察できる遺構は限られている。つまり、廃絶した施設のスペースを遊ばせておくことは許されず、廃絶後の再利用が常に意識されていたことが確認できる。多くの施設が廃棄土坑に利用されていることにも関連することであるが、集落内の空間が施設の改変や廃棄物の投棄に際して高度に利用されていた実態がうかがえる。こうした土地利用の高度化は、集住の密度が高い「町」や「都市」ならではの特質を示している。

(d) 耐久消費財廃棄の廃棄に至るサイクル

都市においては新しいモデルの製品が次々と受け入れられ、そのモデルチェンジのサイクルが短かったことが小野正敏によって指摘されている〔小野一九九七〕。今回筆者は、これと同様の現象を「搬入と廃棄のモデル」に基づいて、博多における出土状況と比較させながら説明した。草戸千軒のⅡ期後半における廃棄量は、この集落の変遷過程の中では最も高い率を示しているが、廃棄物の内容は決して新しいモデルが中心ではなく、相続されてきた古いモデルが多くを占めていることが確認できた。つまり、モデルチェンジのサイクルは決して短いとは言い難いのである。この点では、当時国内随一の貿易港であった博多には及ぶべくもなく、両者の特質の違いが表れていると言えるだろう。

以上、草戸千軒における消費活動の特質を、消費の結果である廃棄物の側面からまとめてみた。そこには限定された空間の中に消費活動が高密度に集約された状況が確認でき、地域経済拠点である「町」としての消費の特質を見出すことができる。しかし一方では、博多との比較に見られるような消費財のモデルチェンジにおける停滞性も指摘できる。あるいは、これが「町」と「都市」における消費の違いを示すものとも

考えられる。ただし、今回の分析は草戸千軒という一集落の分析結果に過ぎない。草戸千軒における消費活動の特質を相対化させ、「町」「都市」における消費の特質を明示するためには、今後その他の集落との比較を進めることが必要で、評価は今後の課題として保留しておきたい。また、考古資料が多様な活動の集積として形成されていることは、繰り返し述べたところである。複雑な資料形成過程を解明するためには、集落で練り広げられた多様な活動を一つ一つ丹念に分析していく作業も必要である。これら残されたいくつかの課題についても、資料形成過程の視点から引き続き取り組んでいきたい。

おわりに

筆者はここで、計量分析データの解釈に資料形成過程の概念を導入することの必要性を論じてきたが、資料形成過程という概念そのものは、考古資料という断片的な痕跡をつなぎ合わせて人間行動を復元するための一つの方法に過ぎない。この他にも、民族考古学や実験考古学など、考古資料と人間行動との橋渡しをするためのいくつかの方法が存在する。特に先史考古学の場合は、ある考古資料がどのような人間行動の結果として残されたかを知る方法が非常に限定されるため、民族考古学・実験考古学の重要度が高い。ところが中・近世考古学の場合は、文献資料・絵画資料・民俗資料など、過去の人間行動の痕跡をとどめる情報が現在の機能的文脈の中に豊富に存在している。したがって、人間行動がどのような痕跡を残すのかという対応関係は、先史考古学に比べるとはるかに把握しやすい。中・近世考古学の豊富な情報をもとに確立された対応関係のモデルは、先史考古学の資料を解釈するためのモデルとしても寄与するところは大きいはずである。その意味で、中・近世の考古資料における資料形成過程の分析が、考古学全体に果たすべき役割は大

きいと考えている。同時に、中・近世考古学における隣接諸分野との共同研究の重要性は、考古資料の解釈方法の確立という観点からも、今後ますます高まってくるだろう。

三年間の共同研究では多くの刺激的な議論に接することができ、これまで進めてきた分析を消費という立場から改めて見直す有意義な機会をもつことができた。末筆ではあるが、参加者の皆様に感謝の意を表したい。

註

- (1) 資料形成過程の理解には、[Renfrew and Bahn 1991] 阿子島 一九八三・一九九九、五十嵐 一九九九) なども参考にした。
- (2) この論文は、[Schiffer 1995] にも収録されている。
- (3) 大宰府分類は、[横田・森田 一九七八] による。
- (4) 草戸千軒の集落が衰退した後の、V期の遺構から出土したものは除外している。
- (5) 漆器の件数は、広島県立歴史博物館で運用している「草戸千軒遺跡出土遺物データベース」による(館外には未公開)。また、資料は出土の単位ごとにとまとめられているため、中には一件のデータの中に複数の個体が含まれている場合もある。そのため、ここに示した漆器の点数は必ずしも個体数を反映するものではない。

引用・参考文献

- Renfrew, Colin and Bahn, Paul 1991 *Archaeology: theories, methods, and practice*. Thames and Hudson.
- Schiffer, Michael B. 1972 *Archaeological context and systemic context*. *American Antiquity* 37 (西藤清秀訳「考古学的情況と体系的状況」『檀原考古学研究所紀要 考古学論叢』第九冊、一九八三)
- Schiffer, Michael B. 1987 *Formation processes of the archaeological record*. University of New Mexico Press.
- Schiffer, Michael B. 1995 *Behavioral archaeology: first principles*. University of Utah Press.
- 阿子島香 一九八三 「シドルレンジセオリー」『考古学論集』I、芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会
- 阿子島香 一九九九 「シドルレンジセオリー」『用語解説現代考古学の方法と理論』

I、同成社

- 網野善彦・石井進・鈴木稔編 一九九七 『中世日本列島の地域性』、名著出版
 網野善彦・石井進・谷口一夫編 一九九五 『中世資料論の現在と課題』、名著出版
 網野善彦・石井進編 一九九二 『中世都市と商人職人』、名著出版
 網野善彦・石井進編 一九九六 『中世』から「近世」へ、名著出版
 五十嵐彰 一九九九 『遺跡形成』『用語解説現代考古学の方法と理論』I、同成社
 池崎讓二・森本朝子 一九八三 『博多出土の宋元陶磁』『考古学ジャーナル』No.217、
 ニュー・サイエンス社
 池崎讓二・森本朝子 一九八八 『海を越えてきた陶磁器』『よみがえる中世』1 東
 アジアの国際都市 博多、平凡社
 石井 進 一九九九 『歴史研究と考古学』『歴博大学院セミナー 考古資料と歴史学』、
 吉川弘文館
 石井 進編 一九九二 『考古学と中世史研究』、名著出版
 石井 進・萩原三雄編 一九九三 『中世社会と墳墓』、名著出版
 岩本正二 一九九六 a 『草戸千軒の発掘成果から』『中世都市研究』3 津・泊・宿、
 新人物往来社
 岩本正二 一九九六 b 『遺構の変遷』『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』V、広島県草
 戸千軒町遺跡調査研究所
 岩本正二 一九九六 c 『草津』としての草戸千軒 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』
 V、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
 宇野隆夫 一九八一 『遺物の考察』『京都大学埋蔵文化財調査報告』II 白河北殿北
 辺の調査、京都大学埋蔵文化財研究センター
 宇野隆夫 一九九二 『食器計量の意義と方法』『国立歴史民俗博物館研究報告』第四
 ○集、国立歴史民俗博物館
 宇野隆夫 一九九七 『中世食器様式の意味するもの―計量分析による使用法の復元
 ―』『国立歴史民俗博物館研究報告』第七一集、国立歴史民俗博物館
 小野正敏 一九八四 『第4回貿易陶磁研究集会』、その成果と課題 『貿易陶磁研究』
 第四号、日本貿易陶磁研究会
 小野正敏 一九九一 『中世陶磁器研究の視点と方法―消費地遺跡からみた問題―』
 『考古学と中世史研究』、名著出版
 小野正敏 一九九五 『中世の考古資料』『岩波講座日本通史』別巻3 史料論、岩波
 書店
 小野正敏 一九九七 『戦国城下町の考古学』、講談社
 木戸雅寿 一九八二 『草戸千軒町遺跡出土の石鍋』『草戸千軒』No.112、広島県草戸千
 軒町遺跡調査研究所
 木戸雅寿 一九九五 『石鍋の生産と流通について』『中近世土器の基礎研究』IX、中

世土器研究会

- 下津間康夫 一九九六 『木製食器類の様相―折敷・箸状木製品・漆器―』『草戸千軒
 町遺跡調査研究報告』V、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
 鈴木康之 一九八九 a 『土師質土器の用途に関する研究ノート(1)』『草戸千軒』No.
 197、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
 鈴木康之 一九八九 b 『土師質土器の用途に関する研究ノート(2)』『草戸千軒』No.
 198、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
 鈴木康之 一九九五 『草戸千軒町遺跡における貿易陶磁の変遷―特に廃棄量の変化を
 めぐって―』『青山考古』第二二号、青山考古学会
 鈴木康之 一九九六 『輸入陶磁器の廃棄と集落の変遷過程』『草戸千軒町遺跡発掘調
 査報告』V、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
 鈴木康之 一九九七 『中世食器の地域性―草戸千軒―』『国立歴史民俗博物館研究報
 告』第七一集、国立歴史民俗博物館
 田中 琢 一九六七 『古代・中世における手工業の発達(4) 畿内』『日本の考古学』
 IV 歴史時代(上)、河出書房
 土井義夫 一九九五 『考古学資料論』『中世史料論の現在と課題』、名著出版
 榎崎彰一 一九六七 『古代・中世における生産上の諸問題』『日本の考古学』IV 歴
 史時代(上)、河出書房
 日本貿易陶磁研究会編 一九八四 『貿易陶磁研究』第4号、日本貿易陶磁研究会
 浜石哲也・菅波正人・林田憲三 一九九三 『博多』三四、福岡市教育委員会
 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 一九八三 『草戸千軒町遺跡調査研究所―十年の
 歩み―』、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 一九九三 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』I、
 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 一九九四 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』II、
 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 一九九五 a 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』III、
 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 一九九五 b 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』IV、
 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 一九九六 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』V、
 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 一九九八 『草戸千軒町遺跡調査報告』2 草戸千軒町遺跡出
 土の滑石製石鍋、広島県立歴史博物館
 広島県立歴史博物館編 一九九九 『開館一〇周年記念 一〇年のあゆみ』、広島県立
 歴史博物館

- 福島政文 一九九四a 「一括出土銭について」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』II、
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
福島政文 一九九四b 「町割の変遷」『よみがえる中世』8 埋もれた港町 草戸千
軒・鞆・尾道、平凡社
藤原良章 一九八八 「中世の食器・考へかわらけ」ノート」『列島の文化史』第
5号、日本エディタースクール出版部
馬淵和雄 一九八七 「中世都市鎌倉の煮炊様態」『青山考古』第5号、青山考古学会
馬淵和雄 一九九七 「食器からみた中世鎌倉の都市空間」『国立歴史民俗博物館研究
報告』第七一集、国立歴史民俗博物館
三上次男・植崎彰一編 一九六七 『日本の考古学』VI 歴史時代(上)、河出書房
横田賢次郎・森田 勉 一九七八 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴
史資料館研究論集』4、九州歴史資料館
横田賢次郎・森本朝子・山本信夫 一九八九 「新安沈船と大宰府・博多の貿易陶磁」
『貿易陶磁研究』No.9、日本貿易陶磁研究会
吉岡康暢 一九九四 「食の文化」『岩波講座日本通史』第8巻 中世2、岩波書店

(広島県立歴史博物館、国立歴史民俗博物館共同研究員)
(二〇〇〇年五月九日受理、二〇〇一年六月二二日審査終了)

Characteristics of Consumption in a Medieval Town “Kusado Sengen”: An Archaeological Study on Formation Processes of Medieval Artifacts

SUZUKI Yasuyuki

As for the archaeological studies on Japanese medieval consumption sites, quantitative analyses have been extensively done and data have been accumulated. However, interpretation of data and methods of reconstructing human activities in the past have not been fully discussed.

In order to reconstruct human activities from archaeological materials, the author of this paper considers it important to understand formation processes of these records. Accordingly, the fundamental concept of formation processes of archaeological records advocated by Michael SCHIFFER is presented first in this paper. Then, the author deals with the Kusado Sengen-cho site (Fukuyama City, Hiroshima Prefecture) a settlement from the mid-thirteenth century to the early sixteenth century. He analyzes how imported ceramics, stone pans made of talc and wooden tableware from the site were thrown into the discard in the settlement. As a result, the following facts are apparent; durable consumer goods were rarely discarded during the period when they were produced and circulated, and were inherited to the next generation in the systemic context, then changes of environment including ones in the settlement pattern were the moments of abandoning many durable consumer goods.

Judging from the patterns of disposal in the Kusado Sengen settlement revealed from the above analysis, one can assume that intensive consuming activities were going on in limited space, which is considered to have shown a part of urban characteristics of this settlement.